

卒業論文・卒業研究の要旨

| | |
|---|---|
| 論文題目 | 大学生のストレスコーピングの柔軟性と BIS・BAS 特性が抑うつに及ぼす影響 |
| 氏名 | ガ ユビン |
| メジャー | 心理学 |
| マイナー | 多文化共生 |
| <p>(要旨)</p> <p>【目的】 本研究では、大学生の進路という長期的なストレス場面において性格特性によるコーピングの柔軟性の差異がストレス反応に及ぼす影響を明らかにすることを目的として、1) 接近・回避動機システムの性格特性 (Behavioral Approach System ; 以下, BAS ; Behavioral Inhibition System; 以下, BIS) とコーピングの柔軟性の関連, 2) BIS・BAS の特性がコーピングの柔軟性を媒介にして、間接的に抑うつといったストレス反応に与える影響, について検討を行なった。【方法】 2025 年 7 月～11 月の間に進学または就職活動に取り組んでいる桜美林大学の 3, 4 年生を対象に google フォームを用いた質問紙調査を実施した。質問項目は ① フェースシート: 性別, 学年, 現在の進路状態, ② 日本語版 BIS・BAS 尺度 (上出・大坊, 2005) : BIS (7 項目), BAS は, 3 下位因子「報酬反応 (Reward responsiveness; 以下, BASR)」「欲求動因 (Drive; 以下, BASD)」「新規性追求 (Fun Seeking; 以下, BASF)」11 項目, 計 18 項目 4 件法, ③ SRS-18 尺度 (鈴木他, 1997) : 3 下位因子「抑うつ・不安」(6 項目), 「不機嫌・怒り」(6 項目), 「無気力」(6 項目)), 計 18 項目 4 件法, ④ CFS-J (Japanese version of the cognitive flexibility scale) 尺度 (Oshiro, 2016) : 12 項目 5 件法であった。【結果と考察】 BIS・BAS 特性とコーピングの柔軟性の関係の強さについて重回帰分析を行った結果, BASF 及び BIS・BASD の交互作用項が高いほど, コーピングの柔軟性が高まることが示された。つまり, 回避的特性が高い場合であっても「欲求動因」によって問題解決という目的を達成する動機づけが維持され, 多様な解決方法の探索につながると考えられる。次に BIS・BAS によるコーピング柔軟性の差異がストレス反応に与える影響について媒介分析を行った。その結果, BAS の3つの要素がそれぞれ異なる接近行動を促進し, 個人が従来用いた対処方略が機能しない場合に他のコーピング方略へ切り替えることに影響を与え, それがストレス低減につながることを示された。一方, BIS とコーピングの柔軟性の間には有意な相関は認められなかった。本研究は, サンプルサイズの小ささや横断的研究による限界点があるため, 時間経過に伴って BIS とコーピングの柔軟性が抑うつといったストレス反応に及ぼす影響が異なる可能性がある。今後は, 縦断的データによるさらなる検討が必要である。</p> | |
| <p>(指導教員の推薦のコメント)</p> <p>本研究課題は, 個人特性 (BIS・BAS) に着目しながらも, コーピングの柔軟性という変容可能な要因を取り入れて検討している点から, 今後の臨床適用に資する研究である。本卒業論文は, 先行研究のレビューから導き出された課題整理と目的の設定, 研究計画の作成と実施, 分析と考察において, 学術的に適切な手法に則って実施されている。また, 当該論文の研究の限界点についても触れられており, 卒業論文ではあるが, 学術論文としての水準に十分達していると判断されるため, 優秀卒業論文として推薦いたします。</p> | |